

灯火法語

人は世間愛欲のなかにありて、
独り生れ、独り死し、
独り去り、独り来る

(無量寿経・卷下)

(現代語訳) 「人は皆、うつろいゆく
世間を愛欲に振りまわされてくらし
独りこの世に生まれ 独りで死に
独りでこの世に来て 独りで去る」

●「愛」と聞けば「人や物事をかけがえのないものと、大切にすること」といった、世間では良き意味合いの語として耳にします。しかし仏教で使われる「愛」は、自らの心身を苦しめる「煩惱」を表す語として使われることが多いです。時には仏さまの慈悲の心を表す、良き意味合いの「愛」もあります。

◆まず煩惱を表す「愛」を紹介しますと、
・「愛執」愛するものごとくに執着し、手放すことができない、とらわれの心。

・「渴愛」喉の渇きのように、満足するまでやまない激しく貪り求める欲望。

・「愛憎」愛と憎しみは表裏一体であり、深く愛するほど、逆に裏切られたときの憎しみは深いものとなる。

・これらは「自分が中心の幸せ」が軸になっている「愛」と言えるでしょう。

今回の法語にある「愛欲」とは、「愛執」や「渴愛」といった私の煩惱を意味する語なのですが、仏さまの「慈悲」を表す、

「愛」の語もいくつか紹介しておきます。

・「慈愛」相手の幸せを願い、決して見返りを求めない愛情。悲しい時には共に寄り添ってゆく慈しみの心。慈悲。

・「愛語」相手のことを思った、思いやりのある、あたたかなことば。

・これらは、「相手が中心の幸せ」を願う慈悲を軸とする愛といえるでしょう。

仏さまは人間の存在を、人は生まれながらにして「愛欲」の中を生き、そこから離れることなく、ときに苦しみを描きだすとおっしゃいます。確かに、気に入るものをどこまでも欲しがり、可愛もの

には愛着を感じ、離すまいと握りしめている自分がいます。逆に気に入らないものを嫌悪し、排除しようということを、当然のこととしてしています。そのことが苦しみを作り出すとは思ってもよらず、私たちの生活は営まれているのです。

さらに仏さまは「独りこの世に生まれ独りで死にゆく 独りこの世に来て 独り去るのだ」と、誰にも代わることを出来ない人生を歩み、ときに誰にも分かってもらえない孤独の苦しみを抱えてあると、人間の存在をご覧になったのです。

◆厳しい言葉が続きますが、そんな愛欲に溺れては苦しみ、独り生死の孤独を感じては悩みつつ生きる「私」。そんな「私」を見捨てることができないと、願いを起こされた仏さまが阿弥陀如来です。

阿弥陀如来は「慈愛」をもって「私」をかけがえのないわが子と愛情を注ぎ、死への孤独や不安を抱えたものに、「独りじゃないよ」と寄り添いつつ、安心を届けようと、今もはたらいっておられます。